文化人の暮らし 身近に

漱石、鷗外、与謝野晶子… 旅行や転居も細かく

「よみうり抄」書籍化

夏目漱石や森鷗外、与謝野鉄幹、晶子の夫婦――。大正時代の読売新聞文芸欄の雑報欄「よみうり抄」は、当時のあらゆる文化人の転居や旅行、執筆予定などの動向を細かく伝えていた。今回刊行される「読売新聞　よみうり抄」大正篇からは、当時の文壇や画壇の姿が生々しく浮かび上がる。＜本文記事1面＞

読売新聞は1874年（明治7年）に創刊され、よみうり抄は98年頃に作られた。当時の紙面は、尾崎紅葉の連載小説「金色夜叉」が反響を呼ぶなど、文芸に力を注いでいた。文化関連の情報の充実を図ったとみられ、大正時代にはほぼ連日掲載されていた。

「与謝野晶子女史　五日午後六時新橋発渡欧の途に就く筈因に出発前に源氏物語中巻を校了、本月中に出版の運びに至るべしと」。これは歌人の与謝野晶子が、有名な欧州旅行に向かった際の様子を伝える1912年（明治45年）5月4日の記事だ。よみうり抄は、対象者の名前の後に、彼らの情報を短く伝えるスタイルだった。

インターネットはもちろん電話も広く普及していなかった当時、作家や美術家に用事がある人は、直接訪ねることも多かった。著名人の転居先の住所、旅行や避暑で留守にしているなどの情報の充実を図ったとみられ、大正時代にはほぼ連日掲載されていた。

「与謝野晶子女史　五日午後六時新橋発渡欧の途に就く筈因に出発前に源氏物語中巻を校了、本月中に出版の運びに至るべしと」。これは歌人の与謝野晶子が、有名な欧州旅行に向かった際の様子を伝える1912年（明治45年）5月4日の記事だ。よみうり抄は、対象者の名前の後に、彼らの情報を短く伝えるスタイルだった。

インターネットはもちろん電話も広く普及していなかった当時、作家や美術家に用事がある人は、直接訪ねることも多かった。著名人の転居先の住所、旅行や避暑で留守にしているなどの情報の充実を図ったとみられ、大正時代にはほぼ連日掲載されていた。

詳しく掲載された。中には、「新片町より芝高輪方面へ移転、多忙の為当分新居を発表せず」（1913年＝大正2年＝3月14日、島崎藤村）といった記述も見られる。

細かな記事から、意外な情報を読み解ける。よみうり抄は、1912年5月に東京・有楽座で開かれた「文芸協会劇」が盛況だったことや主な観覧者を報じた。同9日には森鷗外と夏目漱石が前夜、ともに来場したと伝えている。よみうり抄の記事は、当時の文芸記者たちを中心にして、作家をはじめ文化人を直接訪ねて書き取ったものや、届いた手紙などをもとにしたものも多いとみられる。

今回の刊行は、1912～14年の3年分。今後、3か月おきをめどに計5巻を刊行の予定だ。今回の大正篇第一巻に関わった早稲田大の宗像和重名誉教授は、「よみうり抄は新聞にうがたれた小さな窓だが、文化の潮流を伝える大きな窓につながっている。従来のそれぞれの作家や美術家の年譜の欠けたところを補える情報もある」と話す。

○よみうり抄

○三宅克己氏　来る六月五日頃出発、朝鮮、満洲、支那へ向け、約二ケ月の豫定にて富士越旅行に出発する由○第二回家展覧会　一日より開催の筈なりし処、会場は来る九月迄延期せりと○小川未明氏　此程小石川区白山御殿町百十九番地（移転せし由）○相馬御風氏　猩紅熱床中なりし処、同氏は一日金快離床せし由○吳服橋小石川区役所司ケ谷町百十九番地（移転せし由）○相馬御風氏　猩紅熱床中なりし処、同氏は一日金快離床せし由○吳

五日午後六時新橋発渡欧の途に就く筈因に出発前に源氏物語中巻を校了、本月中に出版の運びに至るべしと○金子薫園氏　此程来遊、数に使されて風邪床に就つて京都行を延期さるべしと○メチールアルコール問題　真に水様の害毒に関する講話　会を開きたる国家医学会にては其筆記を集め、妻記の風目にて発行すべしと○記念興学会　明五日午後一時より小石川区町隆巡院にて開催、上田（文）三宅（雪）両博士等の講演ありと○人見東明氏　猩紅熱床中なりしが昨日金快離床せり○昨夜の文芸協会劇　には内田魯庵、鹿谷小波、市島謙吉、五十嵐力氏等及び左団次、松蔦の自由劇場の人々の見物あり九分の入場者ありたりと

与謝野晶子の渡欧などを伝える1912年5月4日付の「よみうり抄」

与謝野晶子＝国立国会図書館「近代日本人の肖像」から